連載

建設業の技術経営（MOT）

第14章　日本人・日本国・日本建築

藤盛紀明

芝浦工業大学大学院　工学マネジメント研究科　客員教授
FT　テクノロジー　代表

1 ▌国際人はまず日本を知る必要がある

中長期的視野に立てば建設産業もグローバル化は必然であり、そこで活躍する人材は国際人でなければならない。国際人となる基本はまず日本のことを知ることである（図1）。自国のことを知らずして他国のことを語る資格はないし、他国の人の尊敬を得ることはできない。

建築は機能のみならず文化・美・サービスを売り物の一つとするビジネスである。価格競争も重要要素であるが、ひたすら価格競争だけでは生き残りが難しい。日本の建設産業が国際ビジネスにおいて勝利するためには、他を差別化する文化・美・サービスの魅力を持つのも重要な武器である。そのためにも日本の文化・美の本質を探っておく必要がある。

日本・日本人の特質はどこから来たのかは長い間、抱いていた疑問である。足かけ5年間の米国生活で、人間は皆、同じと言う気持とやはり日本人は特殊と言う気持が交錯した。結局、日本人の始まりの縄文と弥生がその根底にあると言う結論に至っている。本章は筆者の現在の感覚である。読者は読者独自の日本観、日本人観、日本文化・建築観を確立していただきたい。

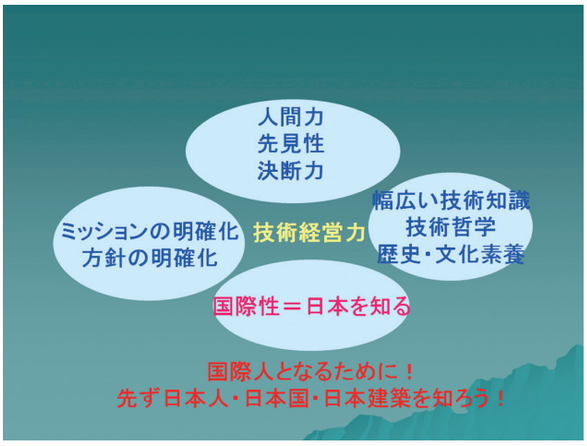

図1　期待されるR＆Dリーダー像

2 ▌日本人の原点の縄文人と弥生人

現代の日本人の気質はいつ、どのようにして形成されてきたのであろうか？　日本列島には3～4万年前から人が住み始め、図2に示すように多くの時代を重ねて来た。現代の日本人の生活・気質はそのすべての時代の積み重ねであるが、とくに縄文時代・弥生時代は今でも多くの影響を与えている。

現在の人類・ホモサピエンスはほぼ10万年前にアフリカを出て世界中に拡散した。今から5万年前、寒冷な気候となり、インドネシア周辺は大きな半島（スンダーランド）となって、そこに人類が到達し、増殖した。その後、地球は温暖化しスンダーランドのかなりの部分は海に沈み、人類は大陸の方へ移動した（図3）。4万年前から2万年前まで地

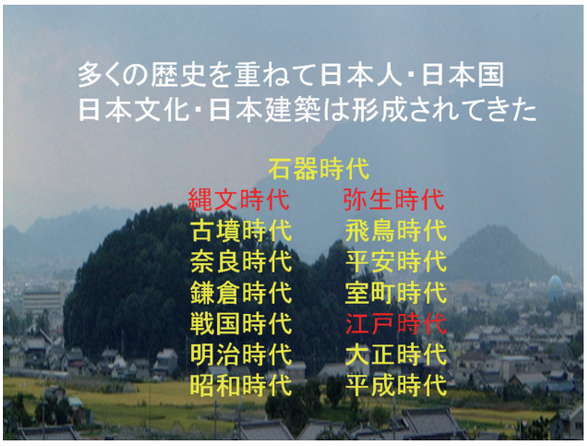

図2　縄文･弥生は日本を語る基本

MOT論　第１４章.indd　1　2010/06/16　13:15:51

図3　現生人類の移動

図4　日本列島全体は同じ石器を使用（北海道含め）

球はまた寒令化し、日本海はほぼ地続きになり、この時期に日本列島に石器人が移動して来た。日本海は大きな湖のようになり、その湖の南回りと北回りの両方からやって来た。最初にやって来た人々は、日本列島でほぼ同じ石器を使用していた。彼らはほぼ同じ文化を有していたと想像される。（図4）

寒令化によって植物が少なくなっていたので、日本列島の旧石器人はナウマンゾウ、オオツノジカなどの動物性食物に多く頼って生活をしていた。2万年前からまた温暖化が始まり、大型の動物が消え、植生も変化し、人々は小動物や魚・貝、植物性食糧を食べるようになった。植物性食糧を煮沸するために、1万6,000年から1万2,000年前頃に土器が考案されたと言われている（測定法の信頼度・精度があり1万6,000年説は確定ではない）。縄文時代の始まりである。現在のところ一番古い土器は青森県外ヶ浜町で発見された大平山元Ⅰ遺跡の土器（図5）で、放射性炭素年代測定では1万6,500年とされている。この土器の内側には炭化物が付着しており、食料の煮炊きに使用されたと推定されている。

縄文文化は北海道から南東諸島まで拡散し、日本列島すべてが縄文文化になったと言われているが、東日本・北日本、西日本・西南日本、南東では様相が大きく異なっていた。東日本・北日本は落葉広葉樹、西日本・西南日本は常緑広葉樹の世界である。落葉広葉樹の世界は食べられる植物が大量に存在し、サケ・マスもこの落葉世界の海の栄養で育ち、縄文らしい縄文文化は落葉広葉樹の世界である。人口もこの北の地域が圧倒的に多かった。現在の日本の文化・建築は大きく3つに分けられるが、この現象は縄文時代から始まったと考えられる。

縄文時代は約1万年間継続したが、その間にも大きな気温変動があった。今から6,000年前は温暖な気候で、人々は集まって村を作り祭りを行った（図6）。4,000年前には寒冷化し、太陽の運行を生活の基準とするようになった。人々は

図5　最も古い土器（1万6,500年前、青森県・大平山元Ⅰ遺跡）（Wikipedia）

図6　6,000年前はかなりの人数がまとまって生活（三内丸山遺跡）

MOT論　第１４章.indd　2　　2010/06/16　13:15:53

図７　縄文人は環状列石を作り集まった
（秋田県北秋田市の伊勢堂岱遺跡）

食料を確保するために分散して居住し、埋葬や祭りに際して集合し、歌垣を行った。（図7）

古代にあっては世界中のどこの地域でも歌垣は人々の求婚の場でもあった。遠くに住んでいた人々が季節を決めて集まり、歌を歌い、祭りをし、祖先を慰霊し、異性を探した。筆者の中学・高校時代も村々の祭りを回り、若い女性に会うのを楽しみにしていた。今でも夏祭り、秋祭りは若い人々が集う場として有効ではなかろうか。

縄文時代には大きな寒暖の変化があっだが、縄文人はそれに柔軟に対応していた。彼らは自然と融合し多様な食糧を確保し、自然と共生して生活していた。

縄文土器には日常道具（図8）と非日常道具（図9）があるが、日常道具も造形美を有しており、岡本太郎氏もその芸術性を絶賛していた。縄文人の土器は個性豊かである。地域によって造形のあり方が異なっている。地域、地域で独自性を持つと言うのは縄文文化の特徴の一つでもある。東日本の土器は激しく派手（図10）で、西日本の土器は控えめである。

彼らの精神生活は豊かで多くの種類の非日常道具が各地で製作された。筆者が最も好きなものは秋田県北秋田市で発掘された石偶である（図11）。「笑い続けて3,000年」のキャッチコピーは発掘当時の村長が作成したと聞いたが、縄文人の笑いが今に聞こえる。

紀元前6～7世紀に弥生人が日本列島にやって来た。彼らは大陸の江南から直接やって来たケースと山東半島から朝鮮半島へ海を渡って来たケース、陸伝いで遼東地域まで行って朝鮮半島へ南下したケースがあった。（図12）

弥生人は縄文人口の少なかった西日本・西南日本に容易に入り込んだ。食糧の少なかったこの地域では稲作があっと言う間に普及し、米がこの地域の人口を急激に増加させた。しかしながら、東日本・北日本には弥生文化はストレートには定着せず、東日本とくに北東北地域は中世まで

図８　日常用途の縄文土器

図９　非日常の縄文土器（土偶）

図 10　東日本の土器は派手

図 11　秋田県森吉遺跡から発掘された石偶

MOT論　第１４章.indd　3　2010/06/16　13:15:57

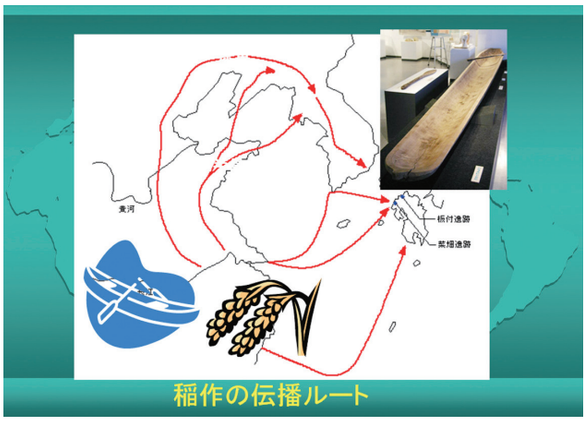

図12　弥生時代の始まり（紀元前６～８世紀）

西日本とは異なる体制を継続した。

縄文人の生活は狩猟・漁労・採集で互いにテリトリーを守り、自然を生かしながらのものであり、季節、季節で異なる食糧を確保し、冬に備えること以外には貯蔵は大きな役割を占めていなかった。

一方、弥生人の生活は稲作のために自然を征服し、改良して水田を開発していくものであった。水や水田適地を求めて戦い、他の地域を征服していった。弥生時代の土器は機能を重視し、薄手で加熱効率が高く装飾性はなく、シンプルである。（図13）

初期の弥生土器は地域の特徴を有していたが、3世紀に入ると奈良盆地東南部に日本の中心勢力が発生し、列島はこの地域の土器あるいはその影響を受けたが分布し始めた。初期大和政権が発生した奈良県桜井市の纒向遺跡や河内に発生した土器（庄内式土器、図14）は、全国へ広がっていった。3世紀に三輪山の麓に突如、巨大な前方後円墳・箸墓古墳が造営され、日本国の中心ができ上がった（図15）。この地域で使用された土器・布留式土器（図16）は全国に瞬く間に拡散した。いずれも薄手の洗練された装飾のない土器であった。

派手に飾る縄文土器とシンプルな弥生土器。これは現代につながる日本人と日本文化の二つの特性の原点である。

日本の縄文文化は世界唯一、日本独自の文化である。「北東北3県と北海道の縄文遺跡」は世界遺産候補となった。筆者が代表の北東北歴史懇話会と秋田県教育庁は共催で2010年3月、東京で世界遺産推進フォーラムを開催し、300人の人々が参加した（図17）。日本文化の原点を今後も多くの視点で語る必要がある。

3 ▌日本人は古代から国際人・海洋民族

石器時代の石器には磨製石器と打製石器があるが、打製石器で重要な役割を果たしたのは黒曜石である。紀元前2万

図13　弥生式土器は機能重視でシンプル（文献８より加工）
（奈良県立橿原考古学研究所付属博物館提供）

図14　奈良・河内から始まった土器が列島に広がった（文献８より加工）
（奈良県立橿原考古学研究所付属博物館提供）

図15　3世紀後半に突如、巨大古墳が奈良に造営される
（奈良県桜井市・箸墓古墳）

図16　古墳時代の始まりを告げる布留式土器
（文献８より加工）（奈良県立橿原考古学研究所付属博物館提供）

MOT論　第１４章.indd　4　2010/06/16　13:16:00

図17 縄文遺跡の世界遺産推進フォーラム

図18 黒曜石は石器時代から海を渡った

図19 縄文時代、秋田県産のアスファルトは列島各地へ運ばれた

図20 稲作の始まりの良緒遺跡と博物館

図21 奈良時代、若い嶋善信尼が留学した百済の皐蘭寺

年ころの関東の遺跡で、伊豆諸島神津島の黒曜石が発見されている。佐賀県腰岳の黒曜石は朝鮮半島南部で発見されている。日本列島の石器時代人は海を越えて活躍していた。（図18）

縄文時代になると人々は定住を始め、特定の土器を製作し、地域の特産物を交換して生活を始めた。新潟県糸魚川のヒスイは九州から北海道まで拡散している。神津島の黒曜石はこの時代にも日本列島の各地へ運ばれている。秋田県でとれる天然アスファルトは東北地方各地や北海道でも発見されている（図19）。縄文時代の日本列島は自然豊であり、原生林で覆われていたに違いない。遠くまで移動するには海と川を船で移動していた。

弥生人は図12に示すように海を渡って来た人々である。中国では紀元前771年に周が西の遊牧民に攻められ、周王の幽が殺害された。ここから中国は大いに乱れ、春秋戦国時代に突入する。紀元前221年に秦の始皇帝が中国を統一して動乱は収まる。この動乱の時代に中国の南岸地域にいた海洋民族は戦火を逃れて各地へ逃れた。春秋時代に南の長江（揚子江）流域では呉と越が戦っていた。この流域は現在では日本の稲の先祖と言われる最古の稲作遺跡が発見されている（図20）。彼らは長江流域から海岸地域に分布する航海民族であった。春秋戦国時代の動乱で彼らがベトナムや韓半島・日本列島へ稲を持って移動してきた。これが弥生文化の始まりであり、弥生人は根っからの航海民族・国際人であった。

この国際人、海洋民族と言う特質は古代から現代に至るまで我々には脈々と引き継がれている。筆者の最も印象に残っているのは奈良時代、15歳の善信尼が韓国（当時の百済）の白馬江の崖に立つ皐蘭寺に二人の女性とともに留学に来ていたことである（図21）。現在でも船でしか行けないような崖の中の寂しい寺に、日本から若い女性三人（寺の壁の絵には二人のみ）だけで留学に来るというのは大変な

MOT論 第１４章.indd 5 2010/06/16 13:16:05

ことである。

もう一つは津田塾大学を創設した津田梅子の留学である。わずか6歳の津田梅子は明治の岩倉使節団と同行して米国に留学している（図22）。父親は梅子に自分の使っていた小さな和英辞典を持たせたと伝えられている。日本人には国際人・海洋民族の血が脈々と流れていると感じる歴史の一こまである。

4 ▌日本国の成立

日本と言う国はいつ成立したかは未だ決着していない。歴史研究者の間では七五三論争と言う言葉がある。邪馬台国時代の3世紀説、倭の五王時代の5世紀説、律令国家成立の7世紀説である。（図23）

現在、2月12日が建国記念の日とされ国民休日である。2月12日と言うのは明治時代の初期に定められ、1948年に廃止された紀元節と同じ日である。この日は、『日本書記』に記載された神武天皇が紀元前660年に即位した日に由来する。筆者の産まれた年は1940年で神武天皇即位から2600年とされ「紀元2600年」のお祝いが盛大に行われた。この年に産まれた多くの人の名前に「紀」の字が付けられた。しかし、現在では神武天皇は実在の人物とは思われていない。

縄文に続く弥生文化は稲作文化なので水田確保のために地域を開発し、水を確保して行った。稲は季節の移り変わりでいろいろ手入れが必要であった。それらのために弥生文化・社会ではリーダーが必要であった。収穫した稲を保管するための倉庫も建設した。弥生文化での建物は穀物をねずみや湿気から守るために高床式であった（図24）。貯蔵物ができるとそれを巡って争いが生じ、水を巡っても争いが生じ、次第に大きな集団ができるようになった。

中国の漢の時代を記述した歴史書『漢書地理志』の中に紀元前後に倭国（後の日本）が100余国に分かれ、その国々は韓半島の楽浪郡を通じて漢にやってきていたと言う記載がある。紀元前後にも盛んに国際交流を行っていた様子が分かる。これ以後、日本列島の勢力が韓半島、中国大陸と盛んに交流している様子は文献・考古学から確認される。『後漢書東夷伝』の記載によれば、倭奴国王が紀元57年に後漢に使いを送り「漢倭奴国王印」の印綬を受けた。実際、江戸時代に筑前国（現在の福岡県）の志賀島からこの金印が発見された（図25）。中国の正式な歴史書である『三国志』の「魏志倭人伝」には今の博多市の周辺に奴国と言う国があると記載されており、現在では発掘によっていろいろな遺跡・遺物が発見されている。

従って、1世紀頃、博多周辺に奴国王と称する人物がいたことは事実である。『後漢書東夷伝』にはこの奴国王のあと紀元107年に倭国王師升が後漢の安帝に使いを送ったとも

図22　明治初年、岩倉使節団と同行した日本人留学生

図23　七五三論争

図24　弥生時代の高床式倉庫

図25　漢倭奴国王印（レプリカ）

MOT論　第１４章.indd　6　2010/06/16　13:16:08

記載されている。この王は博多の隣の前原市にあった伊都国の王であったとされている。前述の「魏志倭人伝」には、伊都国王が使いを送った後、倭国は乱れて国中が治まらず、邪馬台国の女王卑弥呼を女王に据えてようやく国が治まったとしている。この卑弥呼は紀元238年に魏の国へ遣使した。この邪馬台国がどこにあったのかが江戸時代以来の論争で、第5章でも述べたように九州にあったと言う邪馬台国＝九州説と、大和にあったとする邪馬台国＝大和説がある（図26）。邪馬台国が大和にあったとすれば、少なくとも西日本には一つの中心勢力があったことになる。

この時代、日本列島の西側は大きくいくつかの集団に分かれていた（図27）。地域には独自の力が存在していたようである。大和に大きな勢力があったことは事実であるが、それが中心勢力か否かは今後も論争が続くと思われる。

考古学者の大半は邪馬台国＝畿内説であり、逆に文献歴史学者の多くは邪馬台国＝九州説である。筆者自身は邪馬台国は九州にあったと言う説に、より「可能性」があると思っている。倭人伝では「邪馬台国は伊都国（福岡県前原市）の南にある。邪馬台国の南に邪馬台国と争っている狗奴国がある。邪馬台国の東に海を渡ったところにも国があり皆倭種である」と記載されている。

奈良盆地の纒向遺跡が邪馬台国ならばこの地理感覚には全く一致しない。畿内説では狗奴国は東海とされているが畿内の南ではないし、海を渡って東と言う地理感覚も当てはまらない。仮に海を無視すれば東には倭人ではなく毛人と称される続縄文文化の人々がいる。九州説の場合、福岡県と佐賀県の境界にある背振山地より南の地域に邪馬台国があるとすると倭人伝の記述とよく合致する。

「大和」と言う言葉は8世紀になってから使われたもので邪馬台国時代は「ヤマト」と言う表現が良いと思っている。東海大学考古学の北條芳隆教授が整理した古代鉄の分布では、邪馬台国＝畿内説で邪馬台国と言われる奈良周辺と狗奴国とされる東海地域には鉄はほとんどなく、九州には鉄が大量に発掘されている（図28）。古代鉄研究の第一人者、愛媛大学の村上恭通教授の論文でも邪馬台国時代に最も鉄技術が盛んなところは阿蘇山の麓（邪馬台国＝九州説の狗奴国）としている（文献9）。

中国の史書『宋書』に倭王武（雄略天皇と推定されている）の上表文（478年）が記載されている。それによれば倭王武は「昔から我が祖先は自ら甲冑を貫き、山川を跋渉し、安んずる暇も無く、東は毛人を制すること五十五カ国、西は征夷を制すること六十六カ国、北に海を渡って平らげること九十五カ国で強大な国を作りあげた」としている。実際に東の毛人に接する地域の埼玉県の「稲荷山古墳の鉄刀」と西の隼人の地域に接する熊本県の「江田船山古墳の鉄刀」

図26 日本国の始まり3世紀説

図27 弥生時代終末から初期古墳時代の勢力

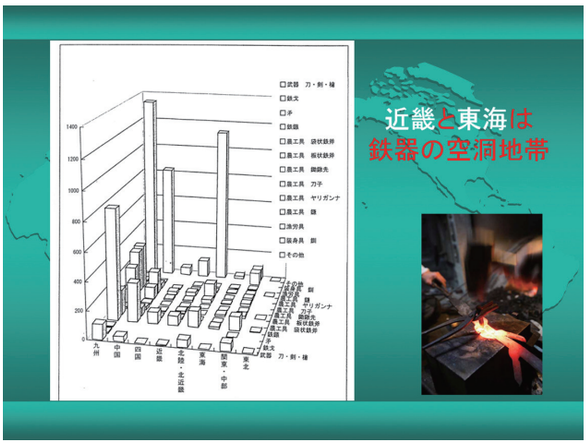

図28 弥生末期（卑弥呼の時代）の鉄器分布
（東海大学北條芳隆教授作成）

MOT論 第１４章.indd 7 2010/06/16 13:16:10

図29　倭の五王の列島征服（5 世紀）

には、雄略天皇と思われる大王の下で働いたと記載されている。この王権は応神・仁徳天皇から始まるいわゆる「倭の五王」とされる勢力で、河内の地域に巨大な古墳群を築いた（図29）。5世紀に日本列島には関東から九州までを統一した中央勢力ができたと思われる。

しかし、この倭の五王の時代でも各地の勢力は独立して活躍し、独自に韓半島や中国大陸と交渉していた。また、ヤマトの王権も日本列島各地の勢力とヤマト内部の有力首長の連合政権であり、「国」としては未整備な状態と考えられる。

6世紀になると朝鮮半島にあった百済から日本に仏教が伝来して来た。ヤマトの豪族の間で仏教を推進する派（蘇我氏）と従来の祖先崇拝の神を祭る派（物部氏）が対立したが、蘇我氏が勝利して以後、日本に仏教文化が入って来た。特に663年に倭・百済連合軍が新羅・唐の連合軍と白村江で戦って大敗し、百済が滅亡した（図30）。その後、百済の人々が大挙して日本列島へやって来た。飛鳥文化はこの百済文化を受け継いだものである（図31）。建築の分野でも寺院建築が入り、本格的な仏教文化が開花した。ただし、百済の木造寺院はこの戦いで壊滅的な被害を受け、現在は焼けなかった石の塔しか残っていない（図32）。現地で感じたことであるが、現在でも百済の領域の人と新羅の領域の人の間には軋轢があるように感じられる。日本でも明治維新に向けての戦いが原因で、会津人と長州人の間にわだかまりがあるのと同じことと思われる。

645年6月12日、中大兄皇子と中臣鎌子が宮中で蘇我入鹿を暗殺した（図33）。蘇我氏は中央政府を牛耳る大豪族で天皇以上の権力を奮っていた。この時代、蘇我氏のみならず物部氏、大伴氏などの中央豪族をはじめ、吉備（岡山）の吉備氏など各地の豪族は独立して力を競っていた。中大兄皇子と中臣鎌子は蘇我氏を倒した645年に大化の改新を発布し、政治の大改革を行った。天皇が全国民から税金を徴収

図 30　白村江の戦い（663 年）で滅亡した百済人は倭国へ逃げた

図 31　飛鳥文化は百済文化

図32　唐・新羅軍に焼かれ石の塔だけが残った百済の寺院

図 33　蘇我入鹿の暗殺（乙巳の変：いっしのへん）（Wikipedia）

MOT論　第１４章.indd　8　　2010/06/16　13:16:14

図34 大化改新は古代国家の成立（7世紀）

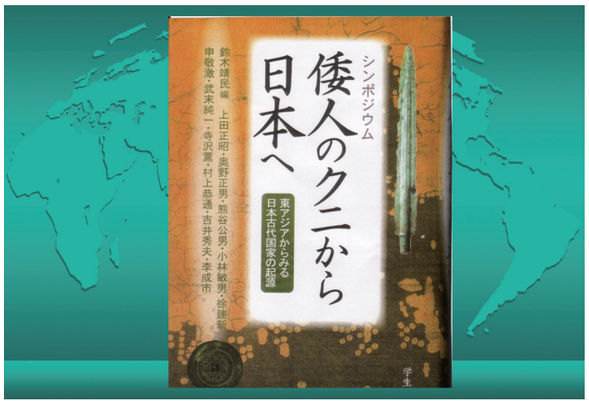

図35 「東アジアの古代文化を考える会」創立30周年記念シンポジウム（七五三論争）の出版

するなどとし、各地の豪族の権力を剥奪し、天皇中心の律令政治を行うこととした。ここで初めて国としての制度が確立し、この7世紀を持って日本国の成立とする説が現在最も有力である（図34）。日本国成立を3世紀、5世紀と唱える学者も7世紀の律令政府の成立時には日本国が完成したと言う説には反対はしていない。

筆者が幹事である市民の歴史研究会「東アジアの古代文化を考える会」では、創立30周年となる2002年12月に「倭人のクニから日本へ」と題する国際シンポジウムを開催し、結果を単行本として出版した（図35）。この国際シンポジウムは753論争に決着をつけようとする企画であったが、結論は得られなかった。

7世紀に日本国ができても日本列島すべてが律令政府の支配下になったのではない。西日本が弥生時代、古墳時代になった時代にも、関東から東は続縄文文化という、縄文文化の延長のような状態であった。律令国家の時代にこの地域の人々は蝦夷と称され、政府に従わない人々として認識されていた（図36）。南東の人々は江戸時代まで独立し、沖縄には琉球王国が独立を保っていた。北海道のアイヌも国家にはならなかったが、今も独自の文化を保っている。

筆者は「北東北歴史懇話会」を設立して縄文時代、蝦夷の時代、奥州藤原時代、鎌倉時代の北東北の歴史を探究している。

図36 7世紀に独立していた蝦夷

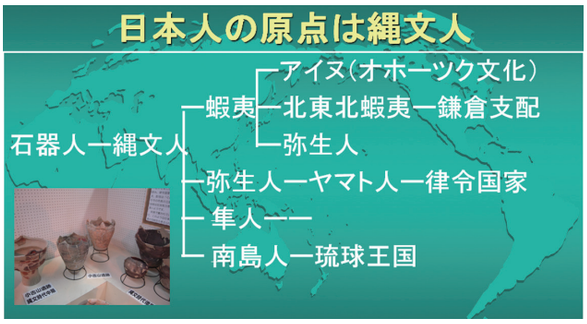

図37 日本人の歴史

5 日本人の特質

日本人の歴史、日本国家の歴史を検討すると、現在の日本人の源流は図37のように整理される。これらが混在として現在の日本人を構成している。従って「日本人の特質」と一般化して語ることは「アメリカ人の特質」と一般化して語ることと同様に困難なことである。それでも米国に住んでみると何か日本人は欧米人と異なる特質を持っているように思える。歴史的に見ると、日本人を図38のように考

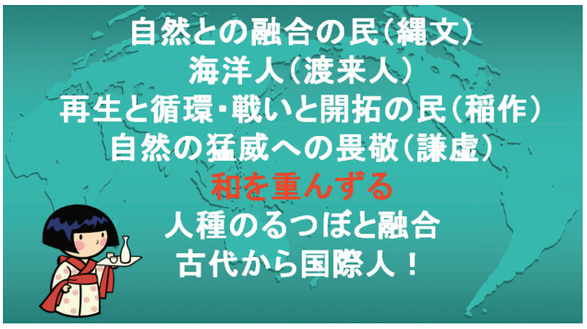

図38 日本人の特質とは

MOT論 第１４章.indd 9 2010/06/16 13:16:17

図39　古代土木技術：狭山池の敷葉工法（補強土工法）
（小山田宏一氏提供）

えることができる。「和を重んずる」は欧米人の「独自性を重んずる」とは対象的である。このことの由来は縄文・弥生以来の歴史から成立してきたのではないかと考える。縄文人は環状列石の祭りの場に定期的に集まって常に情報交換し、集団の和を保ってきた。弥生人は稲作のために集団の和を大切にした。環濠集落の中では和が非常に大切であった。聖徳太子は17条の憲法の一番に「和を以って貴しとす」としている。

もちろん、江戸時代の長い鎖国文化、士農工商の身分制度、江戸の大家と店子の関係なども日本人の和を基本とする文化に大きな影響を与えたと考えられる。

6 | 日本建築

国際人として外国人と建築論や日本建築を語る場合、建築史の事実だけを語るだけでは会話が弾まない。自らの考え、解釈、建築論を立てて話す方が楽しい会話となる。以下の記述は筆者の論であり、読者も一度は日本建築論を検討して見るのがよい。

土木技術についても最近、古代技術が解明されつつある。堤や土手に使われた敷葉工法（図39）、古墳築造技術など興味深いが、今回は論じない。

第3章でも述べたように古代からの日本建築の最大の特徴は「柱」である。縄文時代には多くの遺跡で柱が建てられていた。一直線に並ぶ柱、円形に並ぶ柱（図40）、建物状に配置された柱などである。この柱は神社建築の御柱になっていく。これは神を迎え、祭りを行うための道具と考えられる。神社建築の棟持柱（図41）もその流れと思われる。現在でも諏訪大社や諏訪大社系列の神社では柱を立てる祭りが行われている（図42）。柱は日本建築の原点である。石造や煉瓦造が多かったヨーロッパ、中近東の建築とは大きく異なる。

建築家の菊竹清訓は、日本建築は400年ごとに変革したと

図40　秋田県大湯環状列石遺跡の環状の柱

図41　出雲大社の棟持柱

図42　諏訪大社の御柱建（柴田健氏提供）

MOT論　第１４章.indd　10　2010/06/16　13:16:19

主張している（文献13）。4世紀以前は「竪穴住居」、4世紀は「高床式建築」、8世紀は「寝殿づくり」、12世紀は「書院づくり」、16世紀には「数寄屋づくり」、そして20世紀は「自在づくり」、21世紀には日本型住宅が世界の理想の住宅となるとしている。

大変興味深い論である。これらの建築様式について議論してみたい。

縄文時代の住居は竪穴住居である。竪穴住居周囲を土盛りし、外側には排水溝を設け、内部を1m程度掘り下げる。四本程度の柱などで骨組みをつくり、木や枝を立てかけて屋根とする。建物のすべてを覆う屋根である。屋根には草・土を載せる（図43）。竪穴住居の大きな屋根と土間と言う形式は、長く日本住宅の伝統となっている。竪穴住居は斜めの材で棟を支えている。次に述べる高床式建築は垂直な柱で棟を支えている。この二つの形式も日本建築の二系統として受け継がれていく。

高床式建築（図24）は、弥生人が南方から稲作文化とともに持ってきたと言われる。暑くて湿度の高い南の地域で穀物を保管するのは高床式倉庫が最適であった。建物の腐朽対策としても有効であった。この形式は神社建築の素形にもなった。

寝殿づくりは平安貴族の住居である。池のある庭に南面して寝殿が建っている。その両翼を廊下で結んで増改築が自由である。

各部屋には蔀（しとみ）戸があり、開けると庭と一体となり非常に開放的な空間となる。床は弥生時代の高床、天井はなく床は板張りである。寝殿づくりの主人公は女性で各建物は大部屋式で衣服掛けや几帳で自由に仕切る。畳は移動式の小さなものでこれも自由に移動して使用する。自然と一体となった自由空間建築である。現在に残された建物は少ないが、京都御所（図44）に見ることができる。宇治平等院鳳凰堂（図45）はこの寝殿づくりをお寺にしたものである。

貴族が没落し武家が台頭した鎌倉時代には、武家の住宅として書院づくりが出来た。天井が張られ、畳が一面に敷かれた。書院づくりは男性主体の建物で、部屋は襖・障子で仕切られて床の間・書院がつく。ただし、襖や障子を開ければ大広間となる。個室と広間を自由に変換できるのは西洋建築にない日本建築の一大特徴である。外側に縁側ができたのもこのつくりの時である。書院づくりの12世紀には、日本人の生活様式のほとんどが出来上がっている。書院づくりは襖に豪華な絵を描き、板戸に金箔を塗るなど装飾的になってくる。金閣寺は典型である。時代は下がるが桂離宮の御殿は非常に美しい書院である（図46）。筆者の学生時代には中に入ることができたが、現在は入ることがで

図43　縄文時代の竪穴住居

図44　京都御所清涼殿（寝殿づくり）

図45　寝殿づくりの宇治平等院

図46　洗練された書院づくりの桂離宮御殿

MOT論　第１４章.indd　11　2010/06/16　13:16:22

図47　桂離宮の茶室

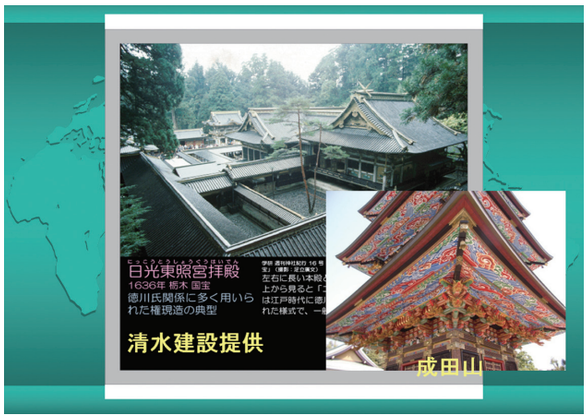

図48　豪華・華美好みは日本人にある

きない。

茶室には桃山風で秀吉好みの「黄金の茶室」と町人の「市中の山居」としての数寄屋がある。数寄屋づくりの源流は平安時代末から中世初期の遁生者の営んだ山居の草庵が源流で、中世・近世に茶の湯文化として定着した。装飾を排して質素なワビ・サビを基本とした。(図47)

日本文化には縄文土器のような個性と情熱にあふれたものと、弥生土器のように洗練された機能美とがある。建築も日光東照宮のような派手な飾りの建築（図48）もあり、質素で洗練された桂離宮の書院もある。茶室も秀吉好みと市中の山居スタイルがある。

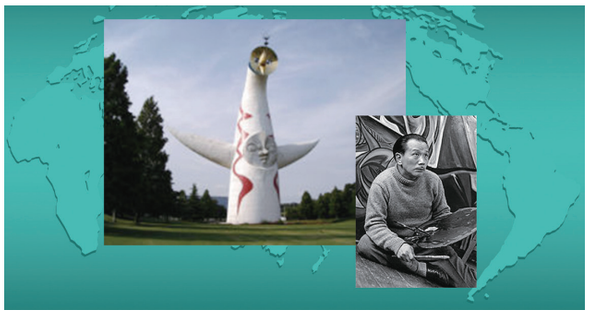

図49　縄文を愛した岡本太郎（Wikipedia）

7 ▌私の好きな建築

外国人、特に欧米人との会食では一般論よりも自らの意見を言うと話がはずむ。彼らの文化の基本が自己主張・独自性であるからである。「貴方の好きな建築は何ですか？」と切り出して会話すると楽しく盛り上がる。当然、我々自身にも答が求められる。

日本文化の基調は縄文文化と弥生文化の二元であり、建築にもこの流れが面々と続いていると言うのが筆者の主張である。縄文の典型は、現代では岡本太郎の大阪万博「太陽の塔」である（図49）。岡本太郎は縄文土器、特に火炎土器を大変好んだと伝えられている。建築家では、丹下健三とその設計事務所ではなかろうか。（図50）

図50　縄文のエネルギー溢れる丹下作品

その対立軸は弥生系列で、たとえば谷口吉郎、吉田五十八（図51）である。そして村野東吾である。谷口吉郎は筆者の恩師で千鳥ヶ淵戦没者墓苑、東京国立博物館東洋館などのシンプルで爽やかなデザイン、吉田五十八の上野の日本芸術院会館（図51）は洗練された弥生文化の系列を引くものと考える。

図51　日本芸術院会館（吉田五十八）

最近の建築では、隈研吾の作品は現地の素材を活用するなど思想は縄文であるがデザインは谷口や吉田同様シンプ

MOT論　第１４章.indd　12　2010/06/16　13:16:25

図52 那珂町馬頭広重美術館（隈研吾）

図53 笠間東洋カントリークラブ（村野東吾）

で弥生と考える（図52）。村野東吾も縄文と弥生の両方の融合と思われる。（図53）

日本列島を北海道から沖縄まで歩くと、民家の様相が土地によって多様であることに気がつく。地域の環境をそのまま映じた地域独特の民家に日本建築の姿を見ることができる。（図54）

この房総の民家は屋根の大きいのが特徴で、縄文の竪穴住居の系統をひいている。京都の町屋は、お互いの屋根が隣家を保護する「けらば」が特徴となっている（図55）。日本人の思想・美的感覚に江戸時代に培われた「いき・すい・つう」がある。日本建築学会の特別調査委員会報告（文献15）で、武庫川女子大学・岡崎甚幸教授は、京都の町屋はあまり明るすぎない、やわらかい光を「いき」として報告している。（図56）

日本の建築物としてお城建築は欠かせない。（図57）

日本建築すべての中で最も好きな建築は、庭園を含めて桂離宮である。桂離宮は日本美・日本建築美の究極の姿である。桂離宮の近くにある「竹の寺」で知られる衣笠山地

図54 屋根が特徴の房総の民家

図55 京町家の隣家を保護する屋根・けらば
（武庫川女子大学岡崎甚幸教授提供）

図56 やわらかい光で「いき」を感じさせる京町家（秦家）
（武庫川女子大学岡崎甚幸教授提供）

図57 桜の姫路城

MOT論 第１４章.indd 13 2010/06/16 13:16:29

蔵院、大徳寺塔頭の一つで細川家の菩提寺「高桐院」なども、桂離宮に劣らぬ最も日本建築らしい建築である。

これらの建築は建物への導入路が素晴らしい。路を通って行くと別の世界へ誘われる。茶室の路地、回遊式泉水庭園の路地は生垣で囲まれ周辺と断絶されて幽玄の世界を演出する。静かな気持ちでこの路地を進むと突然、世界が開け、美しい池が現れる。

桂離宮などの建物は開放的で庭園に面して大きく開かれている。細い柱と框で区切られた空間を通して見る庭園は額縁に入った一幅の絵である(図58)。見る場所を移動するとその額縁の絵は変化する。竹の寺でも門から見た路地にはその効果がある。

建設会社に勤務しているならば、機会を見て美しい日本建築を見ておくことを勧める。何度訪れても心がなごむ。菊竹清訓氏が「日本型住宅が、21世紀の世界の理想住宅となる」と述べたことに全く同感である。

余裕があれば日本古来の芸能にも触れてみるべきである。歌舞伎と能楽は外国人もよく知っている日本の古典芸能である。能の始まりは猿楽や田楽であるが、現在の能は幽玄な雰囲気で、すぐには理解し難いところがある。歌舞伎は大見えを切ったり、宙乗り・早替わりのケレンがあったり、厚く派手な化粧で全体に絢爛豪華で分かりやすい。例えれば歌舞伎（図59）は縄文風、能楽（図60）は弥生風となる。

縄文時代は1万年、弥生時代は1千年。この二つの時代が日本文化の基調である。

図58 日本建築美の極致：桂離宮

図59 歌舞伎座

図60 国立能楽堂

●参考文献

1. 松木武彦『列島創世記』小学館，2007
2. 編集鈴木靖民『倭人のクニから日本へ・東アジアの古代文化を考える会創立30周年記念シンポジウム』学生社，2004
3. 小林達雄『縄文人の文化力』新書館，1999
4. 工藤雅樹『古代蝦夷』吉川弘文館，2004
5. 熊谷公男『古代の蝦夷と城柵』吉川弘文館，2004
6. 上田篤『日本人の心と建築の歴史』鹿島出版会，2006
7. 藤盛紀明「技術からみた建設業の未来（15）」，『鉄構技術』2002.6
8. 奈良県立橿原考古学研究所付属博物館『平成11年度秋季特別展示 古墳のための年代学』1999.10
9. 村上恭通『古代国家成立と鉄器生産』青木書店，2007
10. 上田篤『日本人の心と建築の歴史』鹿島出版界，2006
11. 大田博太郎他編『日本建築の歴史と魅力』彰国社，1996
12. 藤岡通夫他『建築史』市ヶ谷出版社，1967
13. 菊竹清訓『日本型建築の歴史と未来像』学生社，1992
14. 植田文雄『古代の立柱祭祀』学生社，2008
15. 『環境技術と建築・街並み・地域のあり方特別調査委員会報告書』日本建築学会，2010

MOT論 第１４章.indd 14 2010/06/16 13:16:31